阿蘇山と火山信仰

― 神々が宿る山の歴史と伝統 ―

山岳信仰パンフ_Layout_JP.indd 1 2025/03/12 16:38

阿蘇神社

国際的な名声を誇る神社

阿蘇神社は紀元前 282 年に創建されたと考えられます。現在の阿蘇神社は二社から成ります。カルデラ底に広がる阿蘇市にある下宮（下の神社）と、阿蘇山の山頂、噴火口からほんの百数十メートル下方に位置する上宮（上の神社）です。上宮の正式名称は、文字通り「阿蘇山の上の神社」という意味の「阿蘇山上神社」です。上宮、下宮ともに阿蘇山火口を御神体としています。下宮には 1830 年代から 40 年代にかけて建てられた保存状態良好な建物が多数あり、そのうちのいくつかは重要文化財に指定されています。上宮はその少し後、19 世紀の終わり頃に建立されました。現在の上宮は 1958 年建造のコンクリート造りの簡素な一棟建です。火山信仰の目的は、火山の神々をなだめることでした。神々が満足している間は火山は鎮静状態をつづけますが、神の機嫌を損ねると噴火します。たとえ小規模であっても、火山の噴火は農作物や家畜、人間の住居に深刻な被害をもたらす可能性がありました。

阿蘇山の火山信仰についての最初の記述は、中国・隋王朝の正史『隋書』（636 年）に見られます。また、阿蘇山が神聖なものとして認識されるようになった経緯については 8、9 世紀に書かれた日本の文献にも登場します。

天皇が住まう都・京都から遠く離れた地方の神社がこのように大きな注目を集めたのは、阿蘇の火山の挙動が日本全体の運命を予兆するとされていたためでした。阿蘇神社の神職たちは、火口底の水の状態を綿密に監視し、そのいかなる変化も朝廷に報告しました。その変化が凶兆と解釈された場合、朝廷は阿蘇山の噴火と国全体の災いを防ぐために、全国の神社に熱心に祈祷するよう命じました。

阿蘇神社楼門 (国指定重要文化財)

阿蘇山上神社

阿蘇神社の神々

善と悪の二面性

阿蘇神社には、十二柱の神々が祀られています。その十二神柱のうち、特に重要な三神柱は、健磐龍命（たけいわたつのみこと）、その妻の阿蘇都比咩命（あそつひめのみこと）、そして彼らの孫の彦御子神（ひこみこのかみ）です。

日本の神々の多くは人々に対して恩恵をもたらす面と災いをもたらす面を併せ持つと神道では考えられています。つまり自然の恵みと自然災害は共に神によってもたらせられると考えられています。阿蘇山の場合、神の恩恵は豊かな稲作の恵みを支える形で、災いは破壊的な火山の噴火として表れました。

阿蘇神社の二つの役割

噴火を防ぎ豊穣をもたらす

阿蘇神社で行われる儀式や祭礼には二つの重要な役割があります。一つ目は阿蘇山の噴火を防ぐこと、二つ目は豊穣を確保することです。 この二つの役割は相互に結びついています。なぜなら、たとえ小さな噴火であっても、かなりの範囲にわたって農作物や家畜、住居が噴煙や火山灰の被害を受ける可能性があるためです。しかも、火山の噴火は多くの場合一度おこると数か月も続くので、累積した被害は非常に深刻なものになり得ます。

火山の噴火よりも収穫の時期の方がより定期的に訪れるため、神社では火口の鎮静化よりも米作りに関連した儀式や祭りを数多く行っています。

カルデラの起源にまつわる神話

神様が蹴ってできた風景

遠い昔、阿蘇のカルデラは湖を擁していました。このカルデラに人が住み農作ができるようになったのは、カルデラの外壁の一部が崩れ、湖の水が流れ出した後のことでした。地元の神話では、この変容は健磐龍命（たけいわたつのみこと）という神によるものとされています。最初、健磐龍命はカルデラ西側中ほどにある二重峠でカルデラ壁を蹴り崩そうとして失敗しました。そこで、そこから少し南の立野で再び壁に強烈な蹴りを入れ、今度はうまくいきました。壁が崩壊すると、水が流れ出してカルデラは排水されました。

現在の白川と黒川が合流してカルデラから流れ出ている地点は立野と呼ばれています。立野という地名は、健磐龍命が二度目の蹴りの後、バランスを崩して転んだ際に言った「立てんのう」（「立てない」という意味の日本語方言）という言葉に由来します。湖の水を抜くことで、健磐龍命は人々がカルデラの内部で生活し農耕できるようにしました。そのため、健磐龍命は「阿蘇の父」とみなされており、阿蘇山にまつわる十二柱の神々の中で最も重要な神とされています。

阿蘇神社の儀式と祭礼

阿蘇神社の主な祭礼は農作業の周期に合わせたものです。春は田植え、夏は干ばつや豪雨、猛暑、虫害が起きないように祈り、収穫後の秋には神々に感謝をささげます。1982 年、その文化的重要性から、阿蘇の農耕祭事は文化庁から重要無形民俗文化財に指定されました。

阿蘇神社が 3 月に開催する「火振り神事」は、農業の神様の結婚を祝い五穀豊穣を願う祭事で、1000 年以上前から伝わるとされています。「火振り神事（火振り）」では、茅の松明を振り回し、この神社の十二祭神の一柱である農業の守護神・国龍神（くにたつのかみ）とその妻（地域の別の神社から持ってこられたご神木の枝であらわす）との結婚を祝います。二神の婚姻は豊穣をもたらすとされています。

火振り神事

御田祭

７月末に行われる「御田（おんだ）祭」も、豊穣祈願の祭礼です。馬に乗った神職たち、頭から足まで白装束に身を包み神々へ捧げる食物を頭上に載せて運ぶ 14 人の（宇奈利と呼ばれる）女性たち、先端に男・女・雄牛の頭をつけた棒を持った３人の地域の少年たちを伴い、神社の祭神たちが４基の神輿に担がれて、地域の田んぼを見まわります。観客は神輿に実りかけた稲穂を投げつけます。稲穂が神輿の屋根にたくさんつくほど豊作となります。

９月下旬には、米の収穫を祝う「田実祭（田の実りの祭り）」が行われます。この祭りでは流鏑馬（疾走する馬上から鏑矢（かぶらや）を的に射流す日本の伝統武術のこと）が奉納されます。

農耕に特化した祭礼に加え、阿蘇神社の神職たちは毎年６月上旬、「火口鎮祭」を執り行います。神職たちは祝詞を唱え、阿蘇山の三神への供物として、御幣（白い紙の垂れ飾りがついた棒）三本を阿蘇山火口に投げ入れます。

田実祭（流鏑馬）

火口鎮祭

阿蘇山観音祭りの火渡り

西巌殿寺 歴史の概説

約 1300 年の歴史を持つ西巌殿寺は、九州で最も歴史のある寺のひとつです。この寺は、インドから来た最栄という僧侶によって 726 年に創建されたとされます。2016 年の熊本地震とその後の阿蘇山の火山活動で 1890 年建造の建物がひどく損傷したため、2022 年 8 月に以前の物より小さい現在の建物に建て替えられました。

西巌殿寺は自然災害だけでなく、人間の歴史の潮流にも翻弄されてきました。この寺はかつて繁栄を誇った火山信仰の拠点であり、恋人たちの参詣地であり、また素朴な寺院や山伏たちの庵が密集する場所の中核でもありました。しかし、明治時代（1868-1912）の初め、新しい国粋主義政府は、仏教を外国から輸入された望ましくないものとし、仏教と神道を強制的に分離しようとしました。西巌殿寺は十一面観音（仏教の菩薩）と健磐龍命（たけいわたつのみこと）（神道の阿蘇山の神）の両方を祀っていたため、廃寺となりました。寺の本堂は 1871 年に現在の阿蘇市内に移されました。しかし、明治政府の反仏教運動は次第に勢いを失い、山上の寺院は参詣者を迎えるために 1890 年に再建されました。

西巌殿寺の役割

西巌殿寺は千年をゆうに超える昔から阿蘇地域の暮らしに重要な役割を果たしてきました。現在も、阿蘇市にある西巌殿寺の本院の住職は、本尊である十一面観音にお経を上げています。この儀式の目的は阿蘇山の噴火を防ぐことです。阿蘇山が噴出する煙や灰は、田んぼの稲や山腹で草を食む牛に危害を与え、飲用水を汚染します。

住職はまた、観音に参拝者の願い事に応えてくれるようお願いします。これらの願い事は、寺院の入り口に束になって吊るされた五色の細長い布に書かれています。それぞれの色が特定の願いを表しています。白は厄除け、黄色は商売繁盛、緑は合格祈願、紫は病気平癒、赤は恋愛成就です。五色の紐は、本堂内の十一面観音様の御手につながっており、これに触れることで仏様と御手つぎをすることができます。祈願したい色の五縁紐を結びつけることにより、仏様に直接願い事をお伝えすることができます。

阿蘇市の西巌殿寺本院に残る独特の儀式のひとつが、火渡り神事（火渡り）です。毎年春、寺の僧侶たちは、木の枝や「護摩木」という祈りが書かれた平らな木片に残り火が燻る長さ数メートルの道を歩いて渡ります。

今昔の愛の寺

西巌殿寺の左手奥には、「写経ヶ橋」(左京ヶ橋)と呼ばれる溶岩の道があります。「写経」とは仏教の経典の一節を書き写すことです。近代的な道路が整備される前は、写経ヶ橋は火口へ登るための主要な道でした。僧侶や神職だけが山頂まで登ることを許されていました。一般の人々は、150 メートルほど登ったところまでしか行けませんでした。「オンダケサンマイリ」と呼ばれる登山があり、婚前の慣習としても多くの若いカップルがこの場所を詣でました。

オンダケサンマイリをする人々は、春と秋の彼岸にこの寺に訪れました。1860 年代後半まで、寺の西側の開けた場所に数多く住んでいた山伏たちが参詣者たちの登山を先導していました。1871 年に明治政府の命令によって山伏たち（山伏）が退去させられ西巌殿寺が廃寺とされた後も、参詣者は絶えませんでした。大正時代（1912-1926）の記録には、赤い着物を着た女性たちが長い列をなして山を登っていく様子は、遠くから見ると彼岸花の一筋のようだと書かれています。

写経ヶ橋（左京ヶ橋）

西巌殿寺前奥之院と牛の座像

西巌殿寺では古くから縁結び（結婚と恋愛のご縁）のご利益があると考えられていました。このご利益が現代的に解釈され、西巌殿寺奥之院は 2011 年に公式の「恋人の聖地」（プロポーズにぴったりのロマンチックな場所という意味）の認定を受けました。シンボルとなる牛の座像は、2023 年 3 月に設置されました。参拝の際には、この牛を撫でながら願い事をしてみてください。

西巌殿寺前の道標

紅葉の西巌殿寺山門

古坊中

古坊中とは何だったのか

西巌殿寺は、インドから来た最栄という僧によって726年に創建されたとされます。時とともに、この寺は火山信仰と修験道の主要な拠点として確立されました。14~15世紀になると、数百人の山伏と呼ばれる修験道者たちが寺の西側に広がる様々な広さの92区画に分けられた比較的平坦な土地を占有するようになっていました。彼らはそこに37の立派な木造寺院と51の小さくて簡素な茅葺きの小屋を建てたと伝えられています。この山伏と僧侶の共同体は、古坊中として知られるようになりました。坊中とは「僧侶や彼らの居住する坊舎、参詣者の宿坊の集まり」、「古」という接頭語は「古い」という意味です。

修行者たちは日々、瞑想や断食、読経に励んだり、火口内の池を観察して神々の心の様子や意向を探ったり、参詣者が火口を遥拝できるように彼らを一般の人に許された最も高い地点まで案内したりしていました。

1960年代、ある農家が牛を放牧しやすくするためにこの地域を整備していたところ、小さな石塔がいくつか発見されました。2000年代には、熊本大学の火山学者・渡辺一徳教授が試掘調査を実施しました。その結果、山伏の小屋の屋根葺き材だった焼けたススキや寺の建物の木柱が発見されました。

古坊中の歴史

寺院と庵に住む僧や山伏の共同体である古坊中は、12世紀後半から16世紀まで栄えました。しかし、天正年間（1573-1592）に九州の支配権をめぐって敵対する地元の氏族が争うようになると、この人里離れた山上でさえ、生活は徐々に危険になっていきました。16世紀後半には、建物はすっかり閑散としていました。

1588年、戦国武将・豊臣秀吉は、加藤清正（1562-1611）の島津氏討伐と九州平定における武功に報いるため、彼に肥後国（現在の熊本県）の支配権を与えました。11年後の1599年、清正は秀吉の許可を得て、坊中（現在の阿蘇駅の近く）を復興し、以前、古坊中で暮らし礼拝を行なっていた僧侶や山伏たちを呼び戻しました。「坊」とは僧侶や彼らの居住する坊舎、参詣者の宿坊などを含む全体の呼び方で、これらの集まりが「坊中」です。山上にあった古坊中（「古い坊中」の意）と区別するために、この新たな坊中は麓坊中（「山の麓にある坊中」の意）と名付けられました。1632年に清正の息子が失態のために流刑に処せられた後に肥後国の領主となった細川家も、麓坊中を庇護し続けました。

西巌殿寺

行者通り（阿蘇駅から南へまっすぐ伸び、西巌殿寺に向かう道）

＜阿蘇山上の主な史跡＞

発行：阿蘇カルデラツーリズム推進協議会

ASO is Good!
阿蘇市観光協会
ウェブサイト

Instagram
絶景をチェック！
阿蘇市公式
@asostagram

山岳信仰パンフ_Layout_JP.indd 8 2025/03/12 16:39